

月氏の伊存について

定 方 晟

仏教の中国伝来に関する伝承のなかで、魏略のそれは大きな重要性をもつ。この伝承は直接的、間接的にいろいろな文献に引用されているが、三国志の裴松之注にみられる伝承を示してみよう。議論の都合上、前後の文章を非ゴチック体で添えておく。

天竺又有神人名沙律。昔漢哀帝元寿元年博士景盧受大月氏王使伊存口受浮屠經。曰復立者其人也。

西洋の学者で早くこの記事に触れたものにレミュザ、ポーチエ、カニンガムらがいる。⁽¹⁾ポーチエは右の記事を次のように訳した。

漢の哀帝の元寿元年（西紀前二年）、ある学識者の弟子である景盧が大月氏王の使者、伊存口というものを迎え、一仏典を受けた。⁽²⁾

カニンガムはこの記事に基き、西紀前二年に大月氏が中国に使節と仏典を送ったこと、したがってインドは西紀前にすでに大月氏に征服されていたこと、を結論した。⁽³⁾

スペクトは太平寰宇記（十世紀）、通典（九世紀）、通志（一

二世紀）、に含まれる類似の記事を対照し、後二者にしたがつて問題の記事の二番目の「受」を「授」と訂正し、通典にしたがつて「曰復立」の前に「国」の字を補い、次のような訳を示した。

中インドに沙律昔という名の聖人がいた。漢の哀帝の元寿元年に、この博士の弟子である景盧が大月氏王の使者、伊存口というものを迎え、かれに一仏典を授けた。その仏典には「この国（インド）において新たに（王座に）立てられるであろうもの、それはこの男である」と書いてあった。⁽⁴⁾

スペクトの解釈において注意すべきは、この記事はインドにおいてインド人の景盧が大月氏の使者を迎えたことを述べるものであるとしたことと、大月氏はまだインド侵入前の段階にあり、大月氏からインドに送られた使者は仏典を——授けるどころか——受けとったのだ、ということである。スペクトはこの文を予言の形をとった歴史的記録と解釈した。すなわち、伊存口の原音は *ouchka* であり、それはラージャタ

月氏の伊存について（定 方）

月氏の伊存について（定方）

ランギニーに現われるトルシユカ三王の初代フシユカであつて、使者フシユカが西紀前二年のあと、つまり西紀一世紀にインドの王になるに至つたことを示すと考えた。^③

これに対し、レヴィは、景盧は中国人であり、大月氏は仏教を受けたのではなく、授けた（教えた）のだと反論し、次のような訳を考えた。^④

国立学院の正規学生（*élève titulaire du collège impérial*）である景盧は大月氏の王の使者を迎えた。かれは口頭で仏典を受け、それを記憶した。

レヴィによれば、景盧は漢の武帝が設けた「博士弟子」のポストにあるれっきとした中国人である。また伊存口の口は音訳文字ではなく、次の受につけて考えるべき語である。伊存の「伊」は指示代名詞、「存」は動詞「保存する」*conserver*であるから、「伊存」の意味は「かれは記憶した」となる。^⑤

レヴィはドゥヴエリアの解釈「景盧は大月氏王から伊存への使いの役を仰せつかった」をも紹介している。ドゥヴエリアによると、伊存とはウディヤーナかウツジャイニーのことであるという。レヴィはカニシカ王なら中国人をインドへの使者として徴用することも可能であるとコメントを付している。^⑥

これに対してスペクトが反駁をおこない、レヴィがまた自説を弁護した。^⑦レヴィはいう、自分は魏略がまだ存在してい

たであろう時期に近い七世紀の文献（弁正論、沙門不応拜俗等事、広弘明集）を援用して自説（月氏は仏教を——受けたのではなく——授けたのだという説）を補強することができると。^⑧

レヴィは弁正論P（本論付録の文献集参照）を代表としてとりあげ、次のように訳している。^⑨

前漢の哀帝のときに秦景（＝景盧）が月氏国に赴いた。その王は自分の息子である皇太子に命じて、仏教を口授させた。秦景は中国に還つたが、かれが齎した仏経は道経とほとんど同じであつた。

レヴィはこれら仏教文献の伝承に信をおいて、「受……使」についてのさきの訳、すなわち「景盧が使者を迎えた」を「景盧が使者を命ぜられた」に変えている。^⑩次にシャヴァンヌが魏略を翻訳し、その注のなかでこの問題を論じた。^⑪かれの訳は——

昔、哀帝の元寿元年に博士弟子である景盧が大月氏への使いを拜命した。王は自分の皇太子にかれ（景盧）に対し仏経を口授することを命じた。

シャヴァンヌによれば、景盧は正しくは景憲で、この二つは秦景（＝後漢明帝派遣の秦景）とは区別さるべきである。「受……使」の解釈については、景憲が使い、する（歴代三宝紀、弁正論P）、往く（破邪論、釈迦方志、法苑珠林）、至る（弁正論P）とする文献に従うべきである。「伊存」はP等の「令太子」の書き損じである。

シャヴァンヌのこの翻訳をペリオが書評した。ペリオは伊存についてはシャヴァンヌ同様、令太子の誤写と考えた。とくに「太子」は接近して書かれると「存」にまちがわれ易い^⑩、と。ペリオはこの見解をその後も保持している。景盧、景慮、景憲、秦景、秦景憲については、秦景を原形と考えた。伊存に関する議論はフランスで活発におこなわれたが、ドイツ人の فرانケ^⑪やアメリカ人の ウェア^⑫もこれに言及した。ウェアは伊存について、シャヴァンヌやペリオの見解を踏習し、令太子V伊存と注している。

わが国では藤田豊八、羽田亨、白鳥庫吉、境野黄洋、春日礼智、重松俊章、石川博道、塚本善隆^⑬などが問題の記事に触れているが、白鳥はこの記事を信ぜず、石川は疑い、他の学者たちはおおむね信じている。

私自身はこの伝承を伝える諸文献を一般の史書類と、仏教徒のそれとの二群に分け、前者に信頼をおく。前者のうち、たとえば三国志の裴松之注、世説新語の劉孝標注、通典（北宋版）を並べてみると、これらの文献はただ一つの事実を実に正しく伝えているとの感を深くする。すなわち、「むかし漢の哀帝の元寿元年に博士弟子である景盧が、大月氏王の使者である伊存が浮図経を口授するのを受けた」という事実である。

裴松之注と劉孝標注では「受」と「伝」の違いしかない。

月氏の伊存について（定 方）

裴松之注の「受」は他の文献を参照することにより、「授」の誤まりであることが推測できる。劉孝標注の「伝」は「授」と同じことをいっているにすぎない。もしかすると、劉孝標は「授」が「受」とまぎらわしいので「伝」に変えたのかもしれない。通典の「匿」は「盧」が字形の類似によって誤写された結果であろう。他の文献の「慮」や「憲」も同じ理由による誤写であろう。

一方、仏教書に表われる記事は、甄正論を除けば、一般の史書類とかなり相違を示す。ある一群の文献では、伊存が令太子となっている。これは魏略の文を「……景盧受大月氏王使伊存口受（授）浮図経」と切ったために起ったと考えられないだろうか。すなわち、この結果、王使の使は名詞（使者）ではなく動詞（せしめる）と解され、王使以下は「王は伊存に浮図経を口授させた」を意味するとされる。使は二義性をさけるために令に書きかえられる。「伊存」は太子を意味することが知られていて「太子」に書きかえられた、と。さらに、受大月氏の「受」は、安易に意味を通じさせようとする人によって「至」ととり違えられる。「授くるを受く」という構文を把握しそこなった人によって、伊存が使者であることが見失われ、かえって景盧が大月氏に使いたと解されるようになった、というふうに考えられないだろうか。

さて、伊存という言葉について日本の学者はとくに見解を

発表していない⁽³⁰⁾。私は伊存は西北インドの碑文に現われる *erjuna* の音訳語である可能性を提案してみよう。コノウによるタフティバリー碑文に次のように書いてある。

大王グドゥワハラ (治世の) 二六年、一〇三年のヴァイシャーカ月第一日、このめでたき半月に、救済者バラサミが息子と娘とともに、救済者ミラの名誉のため、カバ太子 (*erjuna kapa*) の名誉のため、母と父の名誉のために (この) 祠堂を布施する。

このエルジュナについてコノウは次のようにのべている。

コータンの古サカ語ではサンスクリットの *kumāra* (太子) を翻訳するのに *alyśānar*⁽³¹⁾ のちには *eyśānar* すなわち *alzanar*⁽³²⁾ *ezānar* (*ys=*) という語が使われたが、エルジュナをこれと同一視したくなる、と。コノウはカパをクジューラ・カドフィセスとし、一〇三年を古サカ暦で解釈して西紀一九年に相当するとしている。ペイリイのコータンサカ語辞書には *alyśāna*-項目下に *eyśānar*, *ysānar* の形も出ている。

伊存の発音はカールグレン

伊 GSR 604a *jer/i:vi

存 GSR 432a *dz'wen/dz'uen/ts'un

によつて、上古音 (archaic) は *jer-dz'wen* 中古音 (ancient) は *i-dz'uen* になり、藤堂氏「漢字語源辞典」(七二〇頁、六九二頁) によつて、上古音 (周秦漢の発音) ・*iōt-dzuen* 中古音 (隋唐の発音) ・*ii-dzuen* になり、いずれにしても *erjuna* に

近い。「存」の語頭子音は *ʃ* よりむしろサカ語系の *ʃ* に近いが、サカ語の形はやや後の文献によっている。

僅かな手がかりではあるが、これをもとに私は次のように推理してみる。中国の文献の「伊存」と「太子」についてシヤヴァンヌやペリオは「太子」が正しく、「伊存」はその誤写であると考えたが、両者は実はともに正しく、一方は音訳であり、一方は意識である。

しかし、魏略の「伊存」がクジューラ・カドフィセスかれ自身であるとは限らない。クジューラは西紀一世紀の約九十年間を生きたと推定されている。これが正しければ、かれが西暦前の伊存でありえたはずがない。しかし、「伊存」が太子を意味するとすれば、クジューラの同族中にその名で呼ばれた人物が存在したことは大いにありうる。そして伊存がクジューラに先だつこと僅かの時代の人物とすれば、魏略の記事はにわかに現実性を帯びてくる。それは、後漢明帝の金人の夢のような非現実的要素をもつ後の伝承よりずっと信頼性に富む。

中国人になじみがなく、現代西洋の学者の多くがつまずいたこの「伊存」という言葉は、ひっかきまわされた地層の中の化石のような存在である。しかし、地層の脈絡がいかにかき乱されようと、この化石ひとつが、この地層が西紀前二千年ころに属する可能性を力強く証明している。しかも得体の

知れぬこの化石の存在はこの記事の神話化をはばんだ。「太子」と記す文献のほうでは老子に因む神話化が行われている。伊存という一般人には理解しにくい言葉が使われている事実こそが、この記事が仏教徒のためにする捏造でないことを何よりもよく物語っている。

- 1 2' 3' 4' 5' Specht: Note sur les Yüé-tchi, JA. 1890, pp. 180-185 をみよ。
- 6 7' 8' Lévi: Notes sur les Indo-Scythes, JA. 1897, pp. 14-20 をみよ。
- 9 Specht: Les Indo-Scythes et l'époque du règne de Kanishka, JA. 1897, pp. 166-181 をみよ。
- 10 11' 12' Lévi: Missions de Wang Huen-Tse dans l'Inde, JA. 1900, pp. 450-468 をみよ。
- 13 Ibid., p. 458, l. 27.
- 14 Chavannes: Les pays d'Occident d'après le Wei hio, T'oung Pao, 1905, pp. 546-548.
- 15 Pelliot: Ed. Chavannes—Les pays d'Occident d'après le Wei-hio, BEFEO, 1906, p. 375.
- 16 Pelliot: "Meou-tseu ou les doutes levés", traduit et annoté, T'oung Pao, 1920, p. 391.
- 17 Franke: Zur Frage der Einführung des Buddhismus in China, MSOS 13, pp. 295-305. (未見)
- 18 Ware: Wei shou on Buddhism, T'oung Pao, 1933, pp. 110-111.

月氏の伊存について (定 方)

- 19 これらの学者の文献については鎌田茂雄『中国仏教史』(岩波全書) 16頁24頁等参照。特に重松氏の論文をみられたい。
- 20 史学雑誌三五—七の五九四頁に、重松俊章が伊存=Insiharaにあらざるかと質問したとある。
- 21 Konow: CIL, II-1, Kharosthi Inscriptions, 1929, p. 62.
- 22 Eimerick: Saka Grammatical Studies, 1968, p. 2.
- 23 白鳥が魏略の伝を否定する理由は「元寿元年のころには大月氏はヒンドウクシユ山脈の北にいて、まだ仏教を知らず、ソロアスター教徒だったから」(趣旨)である。しかし、大月氏が西紀前にバクトリアにいて仏教を知ることが不可能ではない。

◎哀帝時仏教伝来記録集 (配列はほぼ年代順)

—— 一般の史書

- 三 国 志 昔漢哀帝元寿元年博士弟子景盧受大月氏王使伊存口授浮屠經
- 裴 松 之 注 昔漢哀帝元寿元年博士弟子景盧受大月氏王使伊存口授浮屠經
- 世 說 新 語 哀帝元寿元年博士弟子秦景憲受大月氏王使伊存口授浮屠經
- 劉 孝 標 注 哀帝元寿元年博士弟子秦景憲受大月氏王使伊存口授浮屠經
- 魏 書 稽 老 志 哀帝時博士弟子秦景使伊存口授浮屠經
- 隋 書 卷 三五 哀帝時博士弟子秦景使伊存口授浮屠經
- 通 典 卷 一九三 昔漢哀帝元寿元年博士弟子景盧受大月氏王使伊存口授浮屠經 (北宋版) [殿版では秦景館]
- 太平 寰 宇 記 昔漢哀帝元寿元年博士弟子景盧受大月氏王使伊存口授浮屠經
- 卷 一八三 昔漢哀帝元寿元年博士弟子景盧受大月氏王使伊存口授浮屠經
- 通 志 卷 一九六 昔漢哀帝元寿元年博士弟子景盧受大月氏王使伊存口授浮屠經

月氏の伊存について(定方)

文献通考

卷二二六

哀帝時博士弟子秦景使伊存口授浮屠經

——仏教書(数字は大正大藏經の巻と頁)

歷代三寶紀

49, 29b

哀帝世元寿年中景憲使於大月氏国受得浮図經

弁正論

52, 522b

前漢哀帝時秦景至月氏国其王令太子口授浮図經
(レヱのころP)

弁正論

52, 524c

前漢哀帝時秦景使月氏国王令太子口授於景(レヱ
イのころP)

破邪論

52, 478c

漢哀帝元寿元年使景憲往大月氏国因誦浮図經還漢

釈迦方志

52, 970b

哀帝元寿年使景憲往大月氏国因誦浮図經還漢

法苑珠林

53, 378c

前漢哀帝元寿年使景憲往大月氏国因誦浮図經還漢

広弘明集

52, 101a

哀帝元寿中景憲受大月氏王口授浮図經

広弘明集

52, 185b

前漢哀帝時秦景使月氏国王令太子口授於景

集沙E.....

52, 456b

哀帝元寿中使景憲往大月氏国因誦浮図經還

集沙E.....

52, 470a

前漢哀帝元狩中秦景使月氏国王令太子口授於景

甄正論

52, 565b

至哀帝元寿元年博士景憲受大月氏王使伊存口授浮
図之經

仏祖統紀

49, 329a

元寿元年遣景憲使大月氏得其王口授浮図經還

仏祖歷代通載

49, 506b

景憲使西域大月氏王令木子口授献浮図經

学術大会開催予告

第三十四回学術大会は、昭和五十八年

六月十一日(土)、十二日(日)

の両日、高野山大学において開催され
ます。

日本印度学仏教学会

(東海大学教授)